英語を用いて自分の思いを整理し、目的に応じて表現できる児童の育成

－言語活動の工夫、振り返り、フィードバックのサイクルを取り入れた授業を通して－

利府町立菅谷台小学校　　渋谷　美香

１　授業づくりに関わる課題

これまでの授業実践では、言語活動が単調なものになってしまい、児童の受動的な様子が見られた。また、授業後に振り返りを行ってきたが、次時や次単元の学習改善に生かされていないという課題があった。

意識調査（表１）から、児童はおおむね外国語の学習を肯定的に捉えており、ペアで話す活動も好んで行っているということが分かった。一方で、発表に対しては苦手意識を持つ児童が半数おり、発表になると声が小さく、消極的になってしまう児童が多い。その理由の多くが緊張する、自信がない、人前で話すのが苦手だというものであった。授業場面では、児童は一問一答でのやり取りはできるものの、相手や目的に応じて話し方を工夫したり伝える内容を考えたりするまでには至っていない。

表１　意識調査（令和５年５月実施　ｎ＝23）

質問　【単位：人】 ◎とてもそう思う　○そう思う △あまりそう思わない　×思わない	◎	○	△	×
①外国語の授業は好きですか。	9	12	2	0
②ペアで英語を話すことは好きですか。	7	12	3	1
③みんなの前で発表することは好きですか。	3	8	10	2
④発表する時には自分の思いが伝わるよう話し方など工夫をしていますか。	8	8	7	0

以上の課題から、児童が話したい、伝えたいと思える言語活動を設定し、自信を持たせるためにペアやグループでの活動を入れながら段階的に学習すること、学習のゴールを児童と共有し、活動ごとに振り返りとフィードバックを繰り返していくことで、児童が英語を用いて自分の思いを表現できるようになると考えた。

２　研究の目的と方法

(1) 目指す児童の姿

研究を通して目指す児童の姿（研究主題）を以下のように考えた。

① 話したいという意欲を持ち、自分の伝えたいことを相手に伝えることのできる児童
（英語を用いて自分の思いを整理する）

② どのような内容をどのように伝えたらよいか考え、自分で判断し、表現することができる児童
（目的に応じて表現できる）

(2) 研究の手立て

目指す児童の姿に迫るため、研究の手立てとして二つ挙げることとする。

① 児童が表現したいと思える言語活動の工夫

児童の意欲を高めるために、児童の実態に合わせた相手意識・目的意識のある言語活動を設定する。誰に、何のためにという意識を持たせながら活動し、「伝えることができた」喜びを味わわせるようにしていく。

児童が自信を持って話すことができるよう、ペアやグループ、対ＡＬＴのようにコミュニケーションの対象を段階的に広げ、伝えたいことを話したり聞いたりする場を多く設定する。英語で話す経験を繰り返し、「話すことができた」という達成感を積み重ねることでもっと話したい、分かりやすく伝えたい、という思いを膨らませたい。そして、相手や目的に応じて、どのような表現を使い、どのような順序で話すか、児童が自分で考える場面を設定し、単に決められた表現を練習するだけの言語活動にならないようにする。

② 振り返りを学習改善に生かすためのフィードバックの工夫

単元のゴールを明確化し、ゴールに向けた活動の流れを児童と共有する。活動計画の中で、単元のゴールや目的を再確認し、児童の意欲を継続させるため、中間評価の場面を設定する。中間評価では、単にできたかできないかの話し合いではなく、友達同士でお互いに良かったところを共有したり、分からないことを共に解決したりする場とする。中間評価で出たことを全体で共有し、もっと話したい、より良い発表にしたいという思いを膨らませるフィードバックを行っていく。

活動の最後には、振り返りの場面を設定し、Padlet（オンライン掲示板アプリ、以下「Padlet」）を活用する。Padlet では、個人の振り返りを蓄積していくことで自身の学習の経過を確認したり、変容を見たりすることもできる。また、友達同士見合うことで他の考えに触れることもできる。児童の振り返りを見取って教師が全体にフィードバックをしたり、児童同士で気付きを交流させたりすることで、次時へつなげるための振り返りになるように活用をしていく。

３　授業実践Ｉ

(1) 単元について

単元名「Unit3 Let’s go to Italy.」
（東京書籍　NEW HORIZON Elementary6）

(2) 研究に関わる手立て

本単元の指導に当たっては、「他国の良さに気付くこ

と」「相手に『伝えたい』という思いを持って、何を紹介するか自分の考えを持つこと」「互いに尋ねたり答えたりしながら自分の思いを英語で伝えるための表現の幅を広げること」ができるように、以下の手立てを講じていく。

①　手立て①について

本単元では、「ツアープランナーになってＡＬＴの先生におすすめの国を紹介しよう」というゴールを設定し、自分が行ってみたいと思う国について、ＡＬＴに話そうという思いを膨らませながら活動できるようにしていく。また、ペアやグループで話す場を段階的に取り入れていき、児童同士が関わり合う機会を増やすと共に、話す相手にうまく伝えるにはどうしたらよいか考えさせ、工夫すれば良い点に気付かせながら、相手意識を持って話すことができるようにする。

②　手立て②について

単元のゴールを明確化し、１単位時間の学習のねらいを児童と共有するため、教師がデモンストレーションを行い、モデルとなるやり取りを示す。

単元の中盤では、中間評価の場面を位置付ける。児童同士がお互いに良かった点や改善点について伝え合う。その後、教師が児童から出た内容を全体に共有し、より良い発表になるようフィードバックを行い、次時への意識付けを図る。

(3) 成果と課題（○：成果　●：課題）

①　手立て①について

○　ＡＬＴにおすすめの国を紹介するというゴールに向けて、「自分の好きな国があるからその国にしよう」「紹介したい世界遺産がある」など、主体的に取り組もうとする児童の様子が見られた。実際に、１学期末の振り返りでは、本単元を一番良く頑張ったと答える児童が過半数を超え、その理由として、「国の魅力をＡＬＴに紹介することができたから」「調べたことの中から自分で考えて話すことができたから」「世界の国のことを知ることができたから」など、学習に前向きに取り組んだ反応が見られた。

○　発表に向けて、ペアからグループへと段階を踏みながら活動を行ったことで、児童が安心感を持って取り組むことができた。単元学習後の実態調査（表２－①）からも、ペアで話すことができるようになったと感じる児童が多かった。

●　実態調査２―②から、発表の際、工夫して話していると答えた児童が５月当初の頃よりも増えた。本単元の発表場面では、ジェスチャーを加えて話す（３名）、国の良さを詳しく伝えるために「It’s～.」の文を２つ以上付け加えて話す（８人）などの様子が見られた。一方で、メモを読んで話す児童（４人）、声の大きさが十分ではない児童もまだ多い。「伝えたいことを整理して話すこと」はできているものの、「相手を意識して伝えるための工夫をして話すこと」についてはまだ十分でないと考えられる。

表２　実態調査（令和５年７月実施　ｎ＝23）

質問　【単位：人】 ◎とてもそう思う　○そう思う △あまりそう思わない　×思わない	◎	○	△	×
①ペアで話すとき相手の話に反応したり質問しかえしたり、進んで話すことができましたか。	16	5	2	0
②発表する時には自分の思いが伝わるよう話し方など工夫をしていますか。	14	5	3	1
③Padlet で振り返りを書いたことを次の時間の学習に生かしていましたか。	11	10	1	1

②　手立て②について

○　単元のゴール、１単位時間のゴールを示すためにＡＬＴとデモンストレーションを行った。デモンストレーションを見ることで、児童がその時間に何をすればよいのかが分かり、活動をスムーズに行うことができた。

○　Padlet での振り返りでは、ほとんどの児童が次時の学習に生かしていると答えた（表２－③）。振り返りの中で、友達からのアドバイスによる変容を書いたり、友達の考えを聞いて気付いたことや「今度は～したい」と次時へ生かしたいことを書いたりする児童が増えた。

●　グループで行った中間評価では、自分のことを伝えるだけで終わってしまい、その後にお互いにアドバイスしたり、良かった点などについてやり取りしたりすることができなかった班もあった。十分な時間を確保できなかったことと、グループで話し合うことに慣れていないということが考えられる。

４　授業実践Ⅱ

(1) 単元について

単元名「Unit5 We all live on the Earth.」
（東京書籍　NEW HORIZON ELEMENTARY6）

(2) 研究に関わる手立て

本単元では「フードチェインについて紹介しよう」というゴールを設定し、クラス間でポスターセッションを行うこととした。

本単元の指導に当たっては、「伝えたいこと（自分で調べたこと）を英語で話す」「どのように伝えるか自分で考える」ことができるように以下の手立てを講じていく。

①　手立て①について

「友達に伝えるために」という相手意識を児童と共有し、自分が紹介したい生き物について話す内容を自分で考え、整理する時間を設ける。教師によるデモンストレーションや既習表現の提示をし、児童から考えを引き出すようにする。

単元のゴールとなる発表に向けて、ペアからグルー

プ、グループ（３人）からグループ（４人）と伝え合う活動を段階を踏みながら行い、話す経験を重ねることで英語を話すことへの抵抗を減らしていくようにする。

②　手立て②について

授業の導入時に、前時の振り返りや児童の様子を基にフィードバックをしたり、復習をしたりする。

グループ活動の際の中間評価を通して、話す内容を整理し直すなど、試行錯誤しながら次の学習へ進むことができるようにする。

授業の終末の振り返りではPadletを活用する。振り返りと授業の姿から児童の変容を見取って称賛のフィードバックをしたり、次時の学習に向けて改善を促すフィードバックをしたりする。

(3) 成果と課題（○：成果　●：課題）

①　手立て①について

○　教師のデモンストレーションを見ることで、単元のゴールとなる発表のイメージを持つことができた。その際、既習表現を提示したことで聞くだけでなく、視覚的にも発表の際にどの表現を使って話せば良いのか確認することができた。

○　グループでの伝え合いによって、友達の表現を参考にすることができていた。その後、自分の伝えたい気持ちや考えを見直す時間を確保したことで、話す内容を増やした児童がいるなど、最初に考えた内容よりも修正が加わった発表になっていた。

●　前時の振り返り、本時のゴールの提示、本時で扱う表現の確認という授業前半の教師の指示や説明に時間がかかった。発問を吟味し、児童がすぐ本時の活動に取り組むことができるようにする必要があった。

●　発表内容を考える際、「書く」ことに意識が向いてしまい、時間がかかった児童が多かった。話したいことを調べて「書く」のではなく「話す」ことに重点を置き、話すためのサポートをするために、ＡＬＴとの役割分担を検討する必要がある。

②　手立て②について

○　前時までの児童の学習の様子と振り返りから、定着が不十分であった内容を取り上げて復習をした。児童にとって学び直す時間となり、自信を持ち、不安を軽減した上で本時の学習に向き合うことができた。

○　Padletで振り返りを行ったことで、児童の考えを教師側が取り上げて全体にフィードバックすることができた。また、毎時間振り返る際にどのようなことについて振り返りをするのか観点を提示したことで、「できた」「分かった」だけの振り返りの記述が少なくなった。

●　中間評価では、友達同士の良さを認め合っていたが、さらに良いものにする意識をもっと高めさせたかった。モデルとなる児童を多く取り上げたり児童同士で良さを紹介し合う場を設けたり、児童がより主となって伝える場にしていく必要がある。

５　まとめ

(1) 効果検証

①　意識調査から（５月、11月実施の比較　n=23）

①外国語の授業は好きですか。		
	４月	11月
とてもそう思う	９人	10人
そう思う	12人	13人
あまりそう思わない	２人	０人
そう思わない	０人	０人
②ペアで英語を話すことは好きですか。		
とてもそう思う	７人	９人
そう思う	12人	13人
あまりそう思わない	３人	１人
そう思わない	１人	０人
（あまりそう思わない、思わないと回答した理由：１１月） ・自分から話しかけに行くことが苦手だから。		
③みんなの前で発表することは好きですか。		
とてもそう思う	３人	３人
そう思う	８人	11人
あまりそう思わない	10人	８人
そう思わない	２人	１人
（あまりそう思わない、思わないと回答した理由：11月） ・人前で話すことが苦手だから（５人） ・みんなの前だと緊張するから（３人） ・自分のことを話すのが恥ずかしいから（１人）		
④発表する時には自分の思いが伝わるよう話し方など工夫をしていますか。		
とてもそう思う	８人	９人
そう思う	８人	12人
あまりそう思わない	７人	２人
そう思わない	０人	０人
（あまりそう思わない、思わないと回答した理由：11月） ・緊張してうまく言えなくなることがあるから。 ・英語を話すことに自信がないから。		

外国語の授業を肯定的に捉える児童がより増えた（質問①）。友達とやり取りをする場面でも相手の話したことに反応の表現を返すなど、英語を話そうとする児童の姿が増えた。

英語を話すことに自信を持てずにいる児童が多かったため、ペアでの活動を多く取り入れてきた。「友達に聞いてもらえる」「分からないことがあっても友達に聞いて話すことができるようになった」と肯定的に捉える児童が多く、ペア活動が有効であったと考える（質問②）。

発表に対しては、改善の様子が見られたものの、一定数が発表に対して依然苦手意識を持っている。その理由の多くが恥ずかしさや緊張であった。発表に対しての肯定的なフィードバックや話す経験の積み重ねを継続していく必要があると考える。

発表に関する質問④では、多くの児童が工夫をしていると答えた。授業実践Ⅰ（Unit3）の発表では、児童は国のおすすめポイントを付け足すなど自分の伝えた

いことを整理して話すことはできた。発表場面の評価でも半数以上の児童は評価規準に到達できた。しかし、単にメモを読むだけの発表や提示された文をただ話すだけの発表も多く、相手を意識した話し方や目的を意識して話す順を入れ替えるなどの工夫をして話すことについては十分に満足できる児童が少なかった。この反省を踏まえ、授業実践Ⅱ（Unit5）では、自分の伝えたいことを整理する時間、友達同士で伝え合う時間を設定した。発表場面では、どの児童もメモを見ずに、アイコンタクトを意識して発表することができた。その結果、表現の定着が不十分で教師や友達の助けをもらいながら話す C に該当する児童がいなかった。また、話す順を入れ替えたり文を付け足したり自分で工夫をして話す児童が増え、十分に満足できる A と評価した児童が授業実践Ⅰよりも増えた。

表３　発表場面での児童の分析（n=23　教師の見取りによる）

単元のゴール（発表）の評価		
	Unit3	Unit5
A：十分満足できる	６人	11 人
B：評価規準	15 人	12 人
C：努力を要する	２人	０人

B:評価規準

Unit3)自分で選んだ国のおすすめのものや良さについて ALT に伝えるために、簡単な語句や表現を使って話している。

Unit5)自分が選んだ生き物とその暮らしについて友達に伝えるために、生き物の住む場所や食べるものについて話している。

②　振り返りの記述の変容から

授業実践Ⅰ(Unit3)と授業実践Ⅱ(Unit5)の児童の振り返りの記述内容（発表の前時のもの）を比較した。

表４　振り返りの記述分析（ｎ＝23　複数回答有り）

	Unit3	Unit5
①話し方（声の大きさ、ジェスチャー、アイコンタクト、メモを見ない）の工夫を意識した振り返り	12 人	17 人
②内容（文の付け足し、文の順序の入れ替え）の工夫を意識した振り返り	６人	13 人

これまで児童の振り返りの中で学習改善を意識した記述の多くは、「次は大きい声で発表できるようにしたい」「メモを見ずにすらすらと話したい」「ジェスチャーを入れて発表してみたい」といった話し方を意識したものが多かった。授業実践Ⅱの振り返りでは、「友達に伝えたり、友達の発表を聞いたりして、もっとセリフを付け足そうと思った」「友達にいいねと言われたので、クイズ形式の発表にしてみようと思いました」「セリフを自分で考えて付け足すことができたので、発表では友達に伝わるように話したい」のように話し方の工夫に加え、内容面の両方を記述する児童が増えた。振り返りの記述（表４）や実態調査（表５）から、ほとんどの児童が次の目標を設定し、学習改善を図ろうとしていることが分かった。

表５　実態調査（令和５年７月と 11 月の比較　ｎ＝23）

Padlet で振り返りを書いたことを次の時間の学習に生かしていましたか。		
	７月	11 月
とてもそう思う	11 人	11 人
そう思う	10 人	10 人
あまりそう思わない	１人	２人
そう思わない	１人	０人

(2) 研究の成果

①　児童が表現したいと思える言語活動の工夫

児童が話したいと思える場面や、伝えたいと思う相手に話す言語活動を設定したことで、英語を話そうという意欲の高まりが見られた。また、相手や目的に応じて、話す内容や順序などの工夫を自分で考える場を設定したことで、児童の話したいという思いが反映された発表が多く見られるようになった。教師のデモンストレーションを参考にしたり友達の発表をまねたりしながら自分の発表を改善しようとする児童の姿が見られたことから、児童が自己調整を図りながら、自分の思いを表現できるようになったと考えた。

②　振り返りを学習改善に生かすためのフィードバックの工夫

これまで紙に書かせてきた振り返りでは、学習活動ができたか、できなかったかを個々に振り返るだけであった。Padlet を活用したことで、友達の意見を参考にしたり、友達の良さを見つけたり、全体で振り返りを共有することができた。児童の記述には「次時には友達に伝わるよう話し方に気を付けたい」「班でうまく伝えることができるようになったので、もっとセリフを付け加えようかと考えた」とあり、次時の学習を改善しようとする意欲の高まりがみられた。また、教師側が全体を掌握し、その時間の課題や成果を確認して児童にすぐフィードバックをしたり、次時の導入の際にフィードバックをしたりすることもでき、教師側の指導改善にも有効であった。

(3) 今後の課題

①　「話す」活動の充実

英語で話したい思いを高めることができても、発表には抵抗がある児童がまだいることから、ペアからグループへの段階を踏んだ活動を継続することと、児童が既習の表現を使って話すことができるように、言語活動を充実させるための方法を検討していく。

②　振り返りの蓄積と活用について

Padlet での振り返りは、その単元の間は児童の振り返りを蓄積して見返すことができ、有効であったが、その単元が終わると児童の手元には記録が残らないため、単元間でも活用できるような方法を考えていきたい。

【引用・参考文献】

1)　国立教育政策研究所教育課程研究センター:「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」小学校外国語・外国語活動、2020